

サン・ロー突破戦



＋カランタンの陥落

「シェルブル半島の戦闘は終わったが、犠牲は恐るべきものだった。大地は爆弾で裂け、砲弾に焼かれ、緑はほとんど残っていなかった。奇妙にかしいだナチの地下壕の間に砲弾の外被やずたになった衣服、弾薬帯など戦闘の残骸が散らばっていた。6月最後の日、オマー・ブラッドレイは口数少ない副司令官コートニー・ホッジス将軍とポワン・デュ・オクを視察した。一略一主堡の背後137mの道に鉄カブトがあるのを見て拾い上げると、それは第2大隊の一兵士のものだった。弾丸が前方からスパッと入って、後方の出口は鋼鉄がざくろのようになっていた。内側はまだ湿っていた。すでに4000名の若いアメリカ兵がDデイ以来死んでいた」(「将軍たちの戦い」D. アーヴィング)

1944年6月6日、5300隻からなる各種艦艇、1500輦の戦車、航空機12,000機からなるアイゼンハワーの連合軍がノルマンディー上陸“オーバーロード作戦”を開始、モントゴメリーの第21軍集団配下、イギリス第2軍の第1、第30軍団は各々カーン、ティリー前面の海岸へ、そしてブラッドレイのアメリカ第1軍の第5、第7の2コ軍団は、オマハ、ユタの2つの海岸にそれぞれ上陸を敢行した。

オマハのアメリカ軍は、ドイツ第352歩兵師団の激し

い攻撃、険しい地形などと相まって莫大な損害を受けつつも、その日の午後には内陸3～4kmまで進出し、橋頭堡を確保した。

一方、先にアメリカ第82、第102空挺師団が降下して、ドイツ軍の背後にかなりの混乱を生じさせていたユタ海岸では、アメリカ軍は比較的軽い損害で海岸に上陸し、その日の真夜中までにその先陣を切った第4師団は、2万名の兵と1700輦の各種車輛を上陸させていた。

このユタ戦区は、史上最大の規模を誇る上陸作戦が行なわれた海岸の中で最重要地点と見なされており、もし他の地域の上陸がすべて挫折したら、このユタに戦力を集中し、コタンタン半島とその北端の重要な港であるシェルブルだけは確保することになっていた。

ユタ、オマハに上陸し、橋頭堡を確保したアメリカ軍の第一の攻撃目標は、コタンタン半島の付け根付近に位置する要衝、国道13号が通るカランタンであった。ロシア兵からなる東部大隊の兵が、戦死したアメリカ軍将校から手に入れたアメリカ第7軍団の作戦計画にはこう記されていた。

「……アメリカ軍はまずユタ、オマハ両上陸橋頭堡をカランタン付近にて連絡し、次いでバイユーでイギリス軍と合流して地歩を固める。次に、アメリカ第7軍団がコタンタン半島西岸のクタンズに進出、南に面して仮の防衛線を設けるが、主力は北進してシェルブルを衝つ」

ノルマンディー上陸作戦の天王山ともいえる アメリカ軍とドイツ軍 の大攻防戦

伊藤裕之助



つまり、このカランタンは2カ所に上陸したアメリカ軍の合流点で、ここでさらに西のバイユーでイギリス軍と合流したアメリカ軍は、上陸戦線を東に切れ目なく安定させてから、その主力を次の重大な目標であるコタンタン半島を北上させ、シェルブール港を取る作戦を立てたのだった。

この要衝の北では、サン・マルクフとアズヴィルの2カ所の砲兵陣地が北からの攻撃を頑強に食い止めており、町は有名なフォン・デア・ハイテ中佐の指揮する第6降下猟兵連隊が、戦車を前面にして攻撃するアメリカ軍に対し抵抗を続けていた。しかし彼らの勇敢な戦いも、弾薬、補給の欠乏により長くは続けられず、包囲全滅を防ぐために撤退せねばならなくなり、6月11日、町をアメリカ軍に明け渡した。

その第1大隊は町の北東、サント・マリー・デュ・モンで包囲され、ほとんど壊滅させられていた。また最後まで抵抗を続けたマルクフの砲台も、21名の負傷者のみを残して翌12日には降伏した。計画では、侵攻の第1日目に陥ちているはずの拠点であった。

それ以前、6月8日には東の要衝バイユーもイギリス軍の手に陥ちており、これで上陸した連合軍の戦線は、アメリカ、イギリス軍と並んで切れ目なく橋頭堡が形成され、後者はティリー、カーン、そしてアメリカ軍はコタンタン半島、シェルブールを目指してさらに激しい攻

撃を続けることになる。

✦コタンタン半島の戦い

カランタンを占領したアメリカ軍は、その主力の4コ師団をユタ戦区から半島の北と西に進め、ドイツ軍をじりじりと半島先端部へと追い込んで行く。

この北へのアメリカ軍の攻勢に対するドイツ軍の守りの要は、シェルブール正面、その南東に位置するモンテブルだった。ここは各種砲兵とロケット砲部隊の効果的な支援を受けた歩兵達の活躍で、アメリカ3コ師団の攻撃をガッチリと受けとめ、戦線を固く保持していた。

しかし西では、アメリカ第82空挺師団の一部と第9歩兵師団が、ドイツ第243、第77歩兵師団の抵抗を受けつつも6月17日、半島西海岸のバルヌヴィルに達した。これで半島は北と南の2つに分断されたわけで、南は北から強行突破を敢行してきた第77歩兵師団もふくめた第84軍団担当地域（マルクス将軍）となり、北はロシア人部隊の第347東部大隊、第84要塞大隊、第709、第243歩兵師団の一部からなる“シェルブール戦隊”として前記軍団とは別の命令系統となった。この地区の責任者は、第709師団長フォン・シュリーベン中将であった。

6月19日まで、頑強にアメリカ軍を防いでいたモンテブルも、側面、正面からの敵の攻撃には耐え切れずハインリヒ計画（シェルブールへの撤収作戦）にもとづいて後退、その翌日にはここを防衛していた戦隊も、シェルブール戦隊に組み込まれた。

ドイツ軍は重装備を持たない弱兵力ながら、部隊を数コの戦闘集団に分けて要所、要所に配置し、この重要な港町を要塞化してよく守ったが、やはり物量で圧倒的に優れたアメリカ軍の猛攻には抗すべくもなく、1000機にも及ぶ爆撃機の猛爆、戦車の波状攻撃の中で防衛拠点は次々に破られていった。

アメリカ陸軍のブラッドレイ中将（右）とパットン中将



コタンタン半島で、破壊されたドイツ軍のサン・マルク砲台を調査するアメリカ軍兵士。



22～24日にわたる猛攻撃で、ドイツ軍司令部周囲のトゥルラヴィル、オクトヴィル、フォール・デュ・ルルもアメリカ軍の手に陥ち、翌25日には港正面の海に戦艦をはじめとする艦隊が現われ、最後のドイツ軍拠点到砲弾を浴びせかけた。

その日の午後、ロンメルはB軍集団司令部から電報が届いた。「総統命令により最後の一弾まで死守せよ」

しかし、夜には35tのダイナマイトによる港湾設備の爆砕が開始され、26日、フォン・シュリーベン将軍の司令部は連合軍に降伏した。

だが、降伏は司令部のみであったため、その後も半島西部の通信半島やオストエック（先のモンブールを守

り続けた砲兵隊ーキューパース少佐ーの前線本部）周辺ではドイツ軍の抵抗が続き、それらが最終的に終息したのは6月28日になってからであった。

こうして、アメリカ、ドイツ両軍に多大の出血を強いた、この大港湾であり要塞であった町の戦闘は集結した。これによって侵攻軍は、初めて本格的な補給港を手に入れることができたのである。

十連合軍の進撃停滞

「連合国ヨーロッパ派遣軍総司令部の全般的な戦略は次のとおりだった。

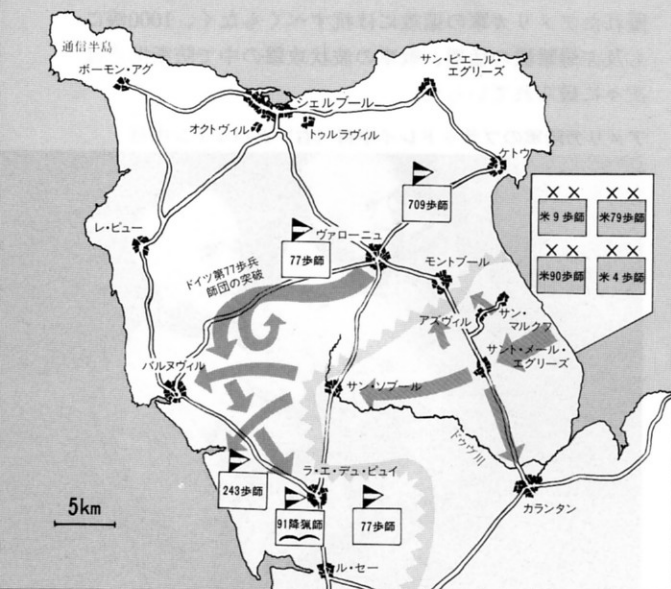
アメリカ第1軍（ブラッドレイ中将）は、ひとたびコタンタン半島を一掃したら、その西方のシェルブールを占領し、次いで東方サン・ローに向かって進撃する。一方イギリス第2軍（デンプシー中将）はアメリカ軍の側面を援護し、ドイツ機甲師団に圧迫を与え続けてこれを拘束し、アメリカ軍戦区へ移動しないように努める。

この計画にもとづくブラッドレイの行動は、アメリカの歩兵および戦車をボカージュ（灌木の茂み）地帯へ向かわせることであった。この辺り一帯にある無数の生垣は、ヒトラーの最良の味方であることがわかった。それは頂上に茨の藪が茂っている泥土の土手で、ノルマンディーの小径や道路に沿って続いていた。この自然の障害物はすこぶる頑丈だったので、戦車は道路上しか行動できないのである。

ブラッドレイは、彼の部隊は特別な助けがぜいとも必要だと感じた。実際、戦車に新しい伐開器を取り付けるまでは、コタンタン半島の掃討作戦をのぞいて戦況は大した進展を見せなかった」（C・ウィルモット）

ウィルモットが書いているように、連合軍の戦略的意図は、パリにより近いカーン方面にイギリス軍が大兵力をもって再三攻勢をかけ、ここにドイツ軍の主力を引き

コタンタン半島の戦い



アメリカ軍はその圧倒的な物量を投入し、ドイツ軍をじりじりとシェルブールに追いつめていった



つけるとともに、西のサン・ロー地区でアメリカ軍が戦線を突破、一路南下してアヴランシュまで進む。そして奔流のように西のブルターニュ半島、東のファレーズ方面へ進むことになっており、そのために用意されていたのが、パットン将軍の強力なパンチ力を持つアメリカ第3軍であった。

カーン戦区には、その陥落にいたる7月9日までに、国防軍3コ（第2、第21、機甲教導）、武装SS4コ（SS第1、第12、第9、第10）の合わせて7コもの機甲師団が投入されていたにもかかわらず、その西のサン・ロー戦区には、機甲戦力を持った師団はSS第17機甲擲弾兵師団“ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン”とSS第2機甲師団“ダス・ライヒ”のみであった。

そして7月初め、このサン・ロー戦線がアメリカ軍の攻勢で危くなってから、カーン、ティリー戦線から機甲教導師団がここに引き抜かれているが、その直後にカーンは陥ちている。

それでも、このカーン戦線は、敵の南への決定的な突破をまだ許していなかったが、サン・ロー前面のアメリカ軍に突破されては、前述したように連合軍の西への大進撃を許してしまうことになる。とくにこの方面の地形が、戦車の機動に適していたからだ。

ドイツ軍は何としても、このコタンタン半島付け根の防衛ラインを守らねばならず、移動してきた機甲教導師団（全兵力ではなくその2/3）を加え、執拗に波状攻撃をくり返すアメリカ軍に対し粘り強く戦っていた。

前記のウィルモットが後半に記しているように、戦車の行動の自由を制限するボカージュ地帯、そしてこのドイツ軍の強い抵抗がブラッドレイの軍の前進をなかなか進展させてくれなかった。その突破をやきもきしながら待っていたパットン将軍は述べている。

「味方の進撃のノロさには全く失望した。オレが指揮官なら2日間で突破して見せる。この方面ではイチカバ

チかまず機甲部隊を先頭に配し、これに航空支援を与えるしか方法はない。攻撃を集中的に加えることが必要なのに、今は全戦線にわたって分散的な攻撃をくり返している」

彼の言葉の中には、遅々として進展しない味方の進撃に対するいら立ちがよく出ているが、確かにこの7月初旬、連合軍の進撃はイギリス、アメリカ両軍戦区で行きづまっており、もしこの時期に、ドイツ軍が残っている予備兵力を総てこのアメリカ軍戦区側面へ向かわせれば、その計画を挫折させることができたかも知れない。

しかしドイツ軍最高司令部は、侵攻地域以外のヨーロッパ各地に点在する機甲師団数コをふくむ強力な予備戦力を動かそうとしなかった。なぜか？信じられないことだが、彼らはこの期にいたってもなお連合軍によるパ・ド・カレー方面への第2の侵攻を憂慮し、とうぜんこのノルマンディー地区へ投入しなければならない兵力を、彼らの脅迫観念から生まれたありえない侵攻のために縛りつけていたのだった。

ヒトラーをはじめとする総統大本営（兼国防軍最高司令部）の敵の物量の前に、ドイツ軍は後退を余儀なくされた





シェルブール市内で白旗をかかげるドイツ兵

令部)では、この頑迷な考えを捨てることができなかったようだが、前線における指揮官達の考えはすでに現実を見通していた。西方総軍の参謀長としてレントシュテット、クルーゲ両元帥に仕えたブルーメントリット將軍は述べている。

「レントシュテット元帥は、ヒトラーにフランスへ来てもらって話をしたいと要請した。レントシュテットとロンメルは一緒にソワソンへ行ってヒトラーと会い、状況を理解してもらうように努力した。カーンとサン・ローという、ノルマンディーにおける2つの要衝はまだわれわれの手にあったけれども、それもそう長くは持ちこたえられないことは明らかであった」

両元帥は、現在のこの情勢を救うために一挙に大撤退

をやらないで(それはヒトラーが到底許しそうになかった)、なおかつ、この窮状を脱する唯一の方法について意見は全く一致していた。つまり、カーンから退いて、その代りにオルヌ川の線に歩兵を残し、機甲師団を抽出してこれを再編成するというのである。そして、この機甲師団をシェルブール半島にいるアメリカ軍の側面に向かっての強力な反撃に使うというのが、2人の計画であった」

もし、この2人の計画がこの7月初めの時点で実行されていたら、連合軍の侵攻作戦全体に影響をおよぼすような打撃を与えていたかも知れないが、そうはならなかった。例によってヒトラーは総てを守り通すことを要求し、そのような柔軟な戦略を受け入れようとしなかったのである。その頑迷な態度は、後にノルマンディー戦線全体の崩壊という大きなツケとなって返ってくることになる。

＋サン・ロー戦区の戦い

SS第2機甲師団の戦車連隊第1大隊のパンター424号車の戦車長は、エルンスト・バルクマンという25才の若い曹長で、彼の師団が守るサン・ロー戦区の全面にはアメリカ第9、第30歩兵師団、第3装甲師団が激しい攻撃をくり返していた。

7月9日、彼はこの戦区で最初のシャーマンを射留め、続く12日にはさらに2輦、14日には4輦の友軍戦車とともにアメリカ軍の後方を断ち切って、ここでも3輦のシャーマンを撃破、同28日から続くわずか2日間の間には15輦



サン・ロー攻略に向うアメリカ軍を支援するために集結した補給部隊



の敵戦車を撃破して騎士十字章を授与された。

この若い戦車長の個人的な戦闘が象徴的に示すように、連合軍の圧倒的な物量、何回となく続く絨毯爆撃、激しい艦砲射撃の嵐の中でもドイツ軍の士気はくじかれてはおらず、果敢に抵抗していた。

7月7日にサン・ロー西北のヴィール運河を渡ったアメリカ第9歩兵師団、サン・ジャン・ド・ディを奇襲占領した同第30歩兵師団は、その正面デゼールまで進出した。さらにアメリカ第3装甲師団も投入され、サン・ロー市に向かって進撃したが、前記バルクマンの所属するSS第2機甲師団“ダス・ライヒ”の反撃によってストップさせられた。

続く11日には、このヴィール川を渡河して進んできたアメリカ軍先鋒部隊の退路を断つため、機甲教導師団の2コ機甲擲弾兵連隊と12輦のパンターが反撃を計画し、敵の後方3kmまで進出したが、ここまでだった。ヤーボの攻撃によって戦車戦力の骨幹を砕かれた戦隊は、それ以上の前進はできなくなっていた。

これは、ノルマンディー戦全体を通して幾度となく演じられた戦闘のひとつの典型といえ、ドイツ軍はチャンスをとらえて有効な反撃を展開しても、もう一步のところで敵の物量によって押し潰されてしまうのだった。

しかし、この反撃は成功こそしなかったが、アメリカ軍の攻撃の出鼻はくじかれ、彼らは受けた手痛い傷をなめつつ次の攻撃開始を待つことになる。

前記したように、連合軍の戦略を見ると、東で激しい攻防戦が展開されているカーンの南戦区よりも、ここサン・ロー戦線のアメリカ軍の突破の方が全戦線を左右する、より危険をはらんだ攻勢だったのだが、ドイツ第7軍司令部には、カーン戦線からのイギリス軍の突破の方

が危険に映り、この方面に戦力を集中していた。連合軍の目論見が図に当たったわけである。

7月19日、サン・ロー市がアメリカ軍によって占領され、次の大攻勢の準備をしていた間もドイツ第7軍団司令部のこの考えは変わらず、同25日には、せっかくこの戦区の守りについていて国防軍の第2機甲師団をカーン戦線に移してしまい、代りに第326歩兵師団を充当している。

だが、この交代が終わった直後、アメリカ軍による大突破攻勢“コブラ作戦”が開始されたのである。友軍爆撃機の誤爆による、アメリカ軍戦線の混乱など判断を誤らせる要素はあったにせよ、ドイツ軍司令部は最後までカーン方面の突破に気を取られており、これがアメリカ軍の攻撃を大いに助けることになった。

＋コブラ作戦

アメリカ軍を迎え撃つべく、繁みに潜むパンターG型





「雨でびしょり濡れたボカージュ地帯に行くオマー・ブラッドレイの強引な戦闘は、7月初めからはほとんど進捗しなかった。戦いは熾烈だった。ドイツ軍の抵抗は激しく、どんなに兵力を投入し、勇猛果敢にやってもピクともしない感じだった。アメリカ第1軍は1万1000名近い死者をふくめて6万2000の損害を出していた。死体は墓地の空地に長い列をなして積み上げられ、黒人埋葬隊

の埋葬を待っていた。これはどうにもならない状態だった」(D・アーヴィング)

この25日に始まる装甲2コ師団(第2、第3)、歩兵3コ師団(第4、第9、第30)によるコブラ作戦が、正にこのどうにもならない状態を開閉するための満を持した攻撃で、それはまず、2000機以上におよぶ爆撃機の絨毯爆撃から始まった。

バイエルライン将軍の機甲教導師団、ハインツ戦隊として編成されていた第13、14降下猟兵連隊の戦区では、器材は空中に吹き飛ばされ、地面は掘り返されて月面のクレーターようになっていった。無論、兵員の損失も大きなものであった。「少なくとも師団の半数が戦闘力を奪われた。死んだか、負傷したか、埋もれたか、発狂した。前線の戦車と砲は破壊され、道は通行不能となった」とバイエルライン将軍は語っている。

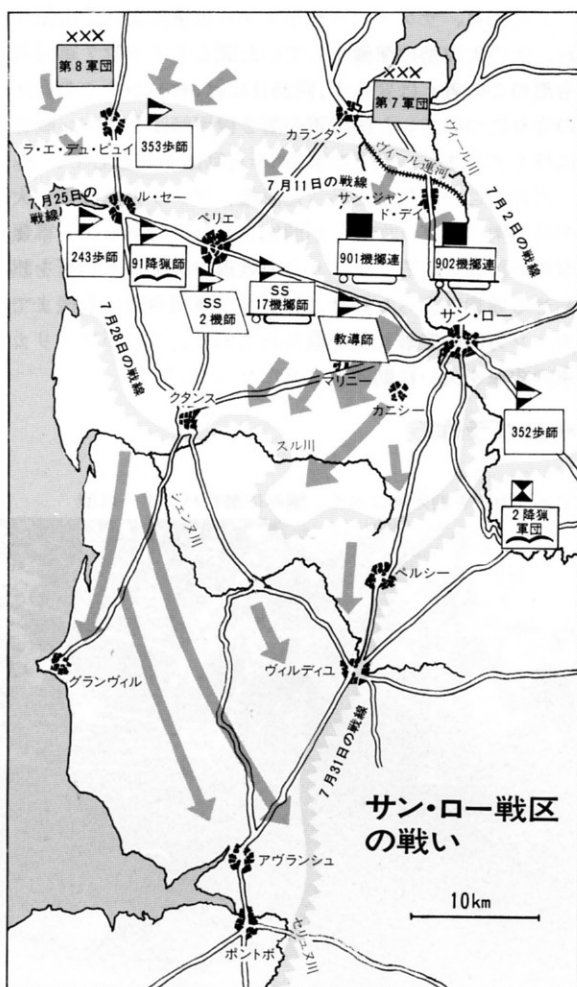
その直後、さらに400機からなる戦闘爆撃機が出動、その30分後には双発爆撃機がダメ押しの攻撃を加えた。正に空からの大砲撃で、しかもそれは、損害をほとんど伴わない破壊的かつ極めて効果的な作戦となった。

かつて戦車260輛、ハーフトラック700輛以上を有し、機甲軍総監グデーリアンをして「この師団だけで貴下(バイエルライン)は英米連合軍を海に追い戻すであろう」といわしめた機甲教導師団は、この空からの波状攻撃によって戦闘力の大半を喪失してしまったのだ。

そして、掘り返された地面の上を戦車の通れる道を作るための工兵の乗ったブルドーザーとともに、アメリカ第7軍団の3コ師団が進んできた。ブラッドレイは、ついに念願の突破孔を開けることに成功したのである。

この地獄のような爆撃機の波状攻撃は、ノルマンディー戦のひとつの側面をまざまざと見せつける代表的なもので、連合軍による制空権の確保が、重大な局面にさいしていかに重要なファクターとなったかを示す典型例だったといえる。

連合軍は、この25日の前にもこの地区に大規模な爆撃を敢行しており、当時ドイツ空軍の戦闘機総監だったA・



ガーランド中将は、この一連の猛攻についてその著書「始めと終り」で次のように書いている。

「その間、侵攻の前線では連合軍の戦略爆撃部隊は、とくに重要な地点に攻撃をしかけたただけだった。そのひとつとして、7月18日にアメリカおよびイギリス空軍の1600機の重爆撃機と350機の中型爆撃機が、とくに激しい戦闘のくりひろげられていたサン・ローに介入した。わずか2、3分の間に7700 tの爆弾が戦場に降り注いだ。これは、この種の戦いに投入された爆撃で最大規模のものだった」

それから数日して、フォン・クルーゲ元帥は指揮官会議を開き、その結果をヒトラーに報告した。現状のように完全に制空権を奪われている以上、陣地を放棄するほかないと伝えたのである。一滝のように落ちてくる爆弾と、群がって襲ってくる敵戦闘機が、わが戦闘部隊、とくに歩兵に与えている心理的影響は真剣に考慮を要する一要因になっている――

1週間後の7月25日、同じ目標地域に対する攻撃がくり返され、前回よりもはるかに大きな戦力が投入された。1500機の重爆撃機、380機の中型爆撃機、559機の戦闘爆撃機がドイツ軍陣地を襲ったのである。

上記で興味深いのは、クルーゲ元帥が報告しているこの徹底した爆撃が兵士達に与える心理的影響についてだが、パイエルライン将軍の「……発狂した」の言葉からもわかるように、波状爆撃が与える効果は物理的な面もちろん多大にあったが、より重大だったのは、防衛するドイツ兵達の士気をくじいていった点にあったのではないだろうか。

翌26日に進撃路の正面マリニーでドイツ軍が抵抗する

サン・ロー付近で破壊されたドイツ軍のIV号戦車。ドイツ軍部隊は、各所で連合軍の物量と未曾有の空爆の前に次々と撃破されていった



ドイツ軍陣地に対し絨毯爆撃を敢行するB-26中型爆撃機

と、すぐさま400機の実験爆撃機を出動させてこれを叩きに叩いた後、アメリカ第2装甲師団がこの突破孔から南下を始め、機甲教導師団の司令部があったカニシーまで進出した。正に彼らが使える物量には限りがないようであった。

フォン・クルーゲ元帥は、事態がここまできたのにまだ機甲教導師団にサン・ローからその西北のペリエまでの線を守るよう命じたが、いったん突破したアメリカ第7軍団の機械化された師団群の南下は押し止どめようがなく、ドイツ第84軍団戦区を突き破って行った。

その右翼、東側にはマインドル将軍が指揮する第2降下猟兵軍団（第3、第5降下猟兵師団）が位置しており、

サン・ローに入城したアメリカ軍。ドイツ軍にとって、これは地獄のようなファレーズ包囲の序曲にすぎなかった



この戦区から装甲2コ師団（第2、第116）をもって突破したアメリカ軍の側面をつくという計画も立てられたが、圧倒的な敵の兵力と制空権の下では、任務の遂行は不可能と判断されて実施されなかった。

そして、敵の南下によって寸断され、西海岸沿いにとり残された第84軍団の残余は、第7軍団司令官P. ハウサー将軍の命令で南東へ撤収し、第2降下猟兵軍団と合流することになった。アメリカ軍は、ドイツ兵のいなくなったコタンタン半島西部を奔流のように南に流れ、もはやそれを阻むことは、絶えざる爆撃と戦闘で疲れ切ったドイツ軍には不可能となっていた。

＋サン・ロー突破さる

1944年7月30日、パットン将軍のアメリカ第3軍配下の第8軍団に属する第4装甲師団が、ついにアヴランシュに到達、翌31日にはその南セリュヌ川南岸に橋頭堡を築き、そこからパットンは自分の大機械化部隊を、西はブルターニュ半島先端のブレストを目指し、南はナントへ、そして東へはアルジャンタンに向けて大機動作戦を展開し始めた。正にグデーリアン顔負けの電撃戦であった。

このパットンの主な後方連絡路となった要衝アヴランシュをつき、進出したパットンの第3軍の後方を断とうとするドイツ軍の“リュティヒ作戦”は、かき集められるだけの総ての戦力（機甲8コ、歩兵、降下猟兵8コ師団）を集中した賭けともいえるものだったが、8月7日には、例によってヤーボの攻撃と、物量で優勢なアメリカ第8軍団の反撃でストップさせられた。そしてこのノルマンディー戦を締めくくる戦いが、ファレーズとアルジャンタン内のせまいポケットの中で決せられたのだった。

ここで包囲されたドイツ第7軍は、抜け殻のようになって脱出した部隊をのぞいてほとんど壊滅し、ドイツのノ

ルマンディー戦線は全面崩壊をもって終わるのである（ファレーズの戦いについては、本誌89年6月号参照）。

サン・ロー、あるいはシェルブル半島で戦った戦車兵、擲弾兵、降下猟兵達は、制空権も補充もない悪条件の下で善戦し、個々の戦いでは超人的な活躍をしたこともあったが、やはり連合軍の圧倒的なローラーの前で防衛戦を戦い抜くことはできなかったのだ。

これは、兵力の重点集中という戦略の原則を実行せず、ただでさえ多くない貴重な機甲戦力を右に左に動かした最高司令部の責任でもあり、彼らはその犠牲になったともいえるだろう。

しかし、当時のドイツと連合国地上部隊の兵力比から見て、いかにドイツ国防軍の兵力運用が巧みでも、カーン、サン・ローのどちらかは守れても両方を守りきることはできなかっただろう。それだけにカーンのイギリス軍、サン・ローのアメリカ軍とも、その記録で突破に成功するまでは非常に重苦しい期間だったと記していることは、それがそのまま、ドイツ軍の勇戦を物語るものだったといえる。

しかしアメリカ・イギリス両軍にとって、カーンでイギリス軍がドイツ軍を引きつけ、アメリカ軍はその間にコタンタン半島を攻略し、サン・ローから南へ突破するというのは上陸前からの彼らの作戦であって、それがたとえ当初の予想以上の日数と犠牲を払ったとしても、その目的を達成できたことは、彼らの戦略が合理的かつ正しかったことを立証している。

こうして連合軍は、上陸戦初期の苦しい戦闘を乗り越え、ノルマンディー背後の開けた土地で機動作戦を展開できる足場を築いた。この結果、戦闘は海岸を離れ、ブルターニュ、ロワール河、アルジャンタンといった北フランス一帯に拡がって行き、パリを指呼の間にのぞむことになる。